印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	霊山寺	無碍	大師は「即身成仏」の教えのなかで「三無碍」仏さまと自分と他人の三つは隔てない無碍のものと説かれます。 無碍とは自在に行き来できること。こころはとらわれることなく自在に、昔の思い出、未来の夢を行き来します。どこにいても家族やご友人のことを思い、しあわせを祈ることができます。 自分のため、人のためとへだてること無く。快いことを自在にできることが、幸せになるちか道です。天の奏でる偶然の美しさにこころを任せます。命の限り心を喜ばせて慈悲のありがたさに感謝します。般若心経の「しんむけーげ」という境地はお遍路さんの悟りの経験そのもの。 お大師様も無碍自在にあなたの心を訪れ、この世に無限にある幸せに気づかせんとお力をくれます。清きあなたに触れようと過去未来の仏も無垢自在に心をよせています。
	極楽寺	慈悲喜捨	慈悲喜捨という言葉を分かりやすく説明すると次の通りです。 「他人の幸福を望み（慈）、他人の不幸を取り除き（悲）、その仕事に満足し（喜）、とらわれることがない（捨）」（渡辺照宏） 私達は人生の中で様々な問題に直面し、その都度それらを解決する為に悩みます。例えば悩んでいる時、誰かがそばに来てくれ、相談に乗って頂き、自分の事のように悩んで下さり、適切なアドバイスを頂き、問題が解決したことを共に喜び合ったという経験がある方も少なくないでしょう。このような行動が慈悲喜捨という四つの言葉であり、仏陀の教えです。 この行動は、損得勘定や利害を抜きにしなければできません。しかし誰でも実践できる教えです。お大師様も困っている方に対して、この教えを実践し続けてこられた方でもあります。お大師様の足跡を歩かれるお遍路さんも同じく実践をして頂きたく存じます。ご自身だけでなく、全ての人々が幸せになる世の中になりますように。
	金泉寺	天朗則垂象	文之起必有由。天朗則垂象。人感則含筆。 『三教指帰』弘法大師若き日の出家宣言書とされる歴史的な著作の書き出し部分からの引用となります。 　四六駢儷体と言う流麗な漢文体を駆使されて、中国南北朝時代の昭明太子によって編纂された詩文集「文選」から的確な引用が多くみられ、漢文学に対する深い理解を証明される著作でもあります。 　その書き出しに、『文章が書かれるには理由があります。天が朗らかに晴れ渡っているときは、吉凶をあらわす象を垂れ、人が何かに感じるときには筆を取るものです』 　大師御自身の若き日のご修行から得心された出家への動機を、天地自然が齎す現象になぞらえながら、奈良の都の官吏の道から、山野の自然に身を置く修行者となる決意は不退転の強いものであると宣言されています。 　その決意は天地自然による現象と同じで「人知を超え、天命とご理解下さいますよう」とご両親への報告の一文でもあると思慮、理解をしています。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	大日寺	光明	全ての仏さまに通ずる大日如来さまの広大無辺な光明真言の功徳を記念印にしたためました。 The abbreviation of a mantra of Light, " 光 明 -Ｋｏｍｙｏ" in the red rubber stamp. The vast limitless good deed of the Vairocana leads all various buddhas.
	地蔵寺	発心	発心とは悟りを得ようとする心（菩提心）を起こすことです。お遍路や仏道修行の初め一歩を踏み出す心を発（おこ）す状態です。
	安楽寺	如実知自心	弘法大師が一番大切にされた大日経というお経に「菩提というは実の如く自心を知るなり」（如実知自心）とあります。 そして弘法大師は、無上正等覚（悟り）の根本とは何か、これを一言でいうと「如実知自心」である―と説かれています。 そして、四国遍路の目的も行き着くところはこの「如実知自心」の一言に尽きます。 それは今の言葉に直しますと、「本当の自分を知る」、そして四国遍路は「本当の自分探しの旅」ということになります。 生まれてから今までの殻を一度捨てて（舎心）、本当の自分に脱皮すること、これを「菩提」といい、この「菩提」の完成を「涅槃」といいます。四国八十八ヶ所は胎藏曼荼羅の「発心」（阿波）、「修行」（土佐）、「菩提」（伊予）、「涅槃」（讃岐）の道場であります。
	十楽寺	抜苦与楽	空海のお言葉に「慈悲とは人を平等に扱う心である」を意味する《抜苦与楽》という語句があります－性霊集巻第六－ 仏の心は慈（いつくしみ）と悲（あわれみ）の二つであるといいます。 大慈は人々に楽を与え幸福へと導く「与楽」 大悲は人々の苦しみを抜く　　「抜苦」 今現在社会が厳しい状況下の中、時空を超えてお大師様のお教えを胸に刻むことで苦しみは柔らぎ、必ずや生きていく楽しさが感じられることでしょう。　　合掌

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	熊谷寺	閼伽法水	閼伽とは、仏教に捧げる清浄な水。法水とは、その水が象徴する、仏様から灌がれる知慧。熊谷寺の谷川はもと閼伽ヶ谷と呼ばれ、修行者が、仏様の法水を求めて水を汲む地でした。弘法大師御生誕千二百五十年のこの時に、清らな水を捧げ、清らな法を授からんことを記念し、特別印を押印致します。
	法輪寺	十善戒	お大師さまは即身成仏をお説きになりました。即身成仏とは、この現世において仏道修行に励めば全ての人が必ず仏となる（＝悟りの世界に行く）ことが可能であるという教えになります。 では、具体的に我々はどういった生き方すれば良いのでしょうか？その答えの一つとして、皆さまがお勤めの際にお唱えする十善戒という教えがあります。 十善戒とは慈雲尊者という方がお説きになった仏教徒として守るべき十の戒めですが、これらには全ての文字の最初に「不」という漢字がついています。これは文字通りではありますが、悪いことをしないことが即ち善いことであるという教えになります。他に向けて善行を行うことはもちろん素晴らしい修行でありますが、まずは自分自身に向けて十の戒めを守った生活を意識することで自身の心の浄化と安定が得られ、ひいては人となり仏となる道であると言われております。十個の戒を守るだけで手軽に始められるので、簡単のように感じられるかもしれませんが、大変奥が深い修行であると思います。どうぞ、お参りの際には改めて十善戒を意識していただければと存じます。
	切幡寺	梵字	ほとけを梵字で表したものを種子（しゅじ）と呼んでいます。諸尊はみな種子をもっています。 千手観世音菩薩の種子はキリク（キリーク）梵字で表します。阿弥陀如来と如意輪観音菩薩もキリクの種子をもちます。 干支の子年生まれは千手観世音菩薩を戌年と亥年生れは阿弥陀如来を守護本尊としています。 切幡寺の納経帳の本尊印はキリク字を文字結合の法則によりカ（梵字）（離因縁）ラ（梵字）（離塵垢）イ（梵字）（自在）アク（梵字）（涅槃）を四字合成（よじごうじょう）で表したものです。「本性清浄を悟り、諸々の執着を離れて涅槃を証得する」と解釈されます。
	藤井寺	空海の道	憩いたる石に合掌遍路たつ 今から数年も前のことになりますが、山形県より一人の歩き遍路さんが来山され一泊、早朝十二番札所にむかわれました。 それから数日してこの方よりお手紙をいただきました。 「あの朝十一番札所より十二番札所まで一日中かかりましたが、無事歩き通しました。山坂の多い厳しい遍路道でしたが、その途中にありました、道しるべの石柱・石仏のお地蔵さまにはどれだけ助けられたことでしょう。私は、その一つ一つに手をあわせて通りすぎました。更には体が疲れ、へんろ道の脇におかれた石に腰をかけ一休みして、さあ出発という時に今まで休んでいたその石に「ありがとう」と両手を合わせました。」 まさしく弘法大師のお教えでもある「仏心」の発露でありましょう。『憩いたる石に合掌遍路たつ』の一句であります。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	焼山寺	梵字タラク・ア	本尊　虚空蔵菩薩
	大日寺	身心一如	理論や知識だけではなく、実際の日常生活において身を持って行動することに理念を掲げております。心と身、両方が一つになってこそ日々の覚りが実際に開かれる。健康な心がないと健康な体を作れず、健康な体がないと健康な心を持てず、二つのバランスを充実することが我々の信念です。
	常楽寺	随喜	他人のなす善を見て、これにしたがい、喜びの心を生ずること。
	国分寺	相承	相承（SOJO）とは仏の悟りの本質を師から弟子へ伝え受け継ぐこと。宗門（曹洞宗）では最近よく耳にする言葉ですが、歴代祖師の遺した偉大な教え（仏法）はもとより学問・芸術・技術、そしてこの四国遍路という文化も含め有りと有らゆる文化を受け継ぎ次の世代へと継承発展させていくことを念願いたします。
	観音寺	諸行無常	諸行とは、この世にある一切の「事物現象」、無常とは、この世にある全てのものは移り変わり変化するもので、何事も同じ状態にはとどまらない。全ての物は変化する、消えるものもあれば生まれるものもある。何かを失っても、いつか何かを得る時も来る。悲しいことがあっても、必ず楽しい時も来る。 雲の形、空の色、人の心、いろいろなものが常に変化し同じ状態を保つ事は、一切なく、諸行無常を知る事で形あるものに執着する事なく、不安や悲しみが軽減されるといえます。 今この瞬間を精一杯生きたいものです。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	井戸寺	中道	「中道」とは相互に矛盾対立する二つの極端な立場のどれからも離れた自由な立場、つまり右でもなければ、左でもない事。「中道」はお釈迦様も説かれておりますし、弘法大師もまた、中道の事を説いておられます。
	恩山寺	信修忽證	「信修すれば忽ちに證ず」 お大師様の著された『般若心経秘鍵』の中にある一句です。文字の通り、お大師様の教を信じて修行すれば（行いを為せば）忽ちに結果即ち利益を得ることが出来るという意味です。信じるとは、南無（帰依します）という言葉と同じで、結果はどうであろうとも全てをお大師様におまかせしますということです。それゆえに信という言葉を疎かにしてはなりません。
	立江寺	済世利人	弘法大師さまは、真言宗を立教開宗され、四国八十八ヶ所霊場を開創されました、宗教界の巨星であられます。 お大師さまは、世を救い、人びとに利益を施す「済世利人」のお心を抱かれ、世のため民衆のために「綜芸種智院」という民衆学校を開設、「満濃池」の修築など数多の現世利益をもたらされた驚異的な偉人であります。 お大師さまの慈悲の行は、今もなお「済世利人」の生き仏として多くの人々が慕れています。 お大師さまのお心と、私たちの信心が一体となる「同行二人」の四国遍路と巡拝者の永遠の隆昌を願い揮毫いたしました。
	鶴林寺	代受苦	
	太龍寺	剣落太龍峰	ツルギはタイリュウの峰にオチ 幕末三舟のひとり高橋泥舟が詠んだ漢詩の初句です。大師が『求聞持法』を御修行中に虚空蔵菩薩が所持する宝剣が壇上に飛来し尊と大師が感應し功験が顕われた様子です。 以来 1200 有余年法燈は絶える事なく受け継がれ修行僧は登峰精進しています。 次句　杵懸高野松 旱天霖雨足 瓶外有真龍 明治壬辰夏日（明治 25 年）1892 泥舟逸人

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	平等寺	善説佛語	善く説かれたものは仏の教えである。仏教の開祖ブッダの説いた教えに沿う内容であれば、仏の言葉と違わないという意味だ。 どれだけ望んでも、もうブッダに会うことはできないし、一二〇〇年前に御入定された弘法大師空海とも、直に語らうことはできない。 だがその教えは、大師ご生誕一二五〇年を迎える現在まで、人々の間で受け継がれ、四国においては、八十八ヶ所の巡礼とそれをお迎えするお接待という形で、僧俗問わず、日々実践され続けている。 真言宗ではない他宗派の教義でも、外国人巡礼者が語る他宗教の教えでも、神道の精神でも、日々の雑談でも、善く説かれたものであれば、すべて仏の教えであり大師の思いである。 お遍路さんがここ四国で現代の善き教えと出会い、学び、それを実践する人へと進むことを願って、平等寺ではこの言葉を印する。
	薬王寺	功徳力	「業障重　功徳軽」（性霊集） 神仏のめぐみ、ご利益。
	最御崎寺	室戸岬　悟り	「土州室戸の崎に勤念す。谷響きを惜しまず明星来影す。」三教指帰より 室戸岬は弘法大師 19 歳の御時、虚空蔵求聞持法をご修行され明星が口の中に飛び込んでくるという神秘的な体験をなされ悟りを開かれた場所です。 また、ご修行をされ悟りを開かれた場所室戸岬の景色空と海に感銘を受けられご自分の名を「空海」と懐けられた場所でもあります。
	津照寺	道	我等と衆生と皆共に、お大師様の道を歩んで行きましょう。
	金剛頂寺	行道	行道（ぎょうどう） 金剛頂寺は、弘法大師空海が密教道場として開創される。また、第二世の智光上人は、「弘法大師伝」によると、“世に隠れたる聖人二人あり。一人は大和の室生寺堅慧大徳、一人は土佐の金剛頂寺の智光上人。堅慧は智慧第一の人、智光は行力第一の聖人”と讃えられている。 古来より金剛頂寺の在る山を“行道崎”と呼ばれる。その由来は、当寺と３０余町（約３㎞）離れた場所にある不動堂（飛地境内）とを、修行のため往来（行道）したことから、この山を“行道崎”と名付けられたとされる。 　不動堂は、断崖絶壁の岩山にあり、この地が大師ゆかりの修行地であるとともに、岩肌に残る楔跡が修験道の聖地として盛んであったことを物語っている。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	神峯寺	関所	四国霊場には関所寺がある。 十九番立江寺（阿波） 二十七番神峯寺（土佐） 六十番横峰寺（伊予） 六十六番雲辺寺（讃岐） これら四ヶ寺が、それぞれの国の関所とされる。 関所寺とは、お遍路さんの素行を監視し、遍路自身が自己反省をしたり、改めて心をひきしめる場でもある。 お遍路さんにもっと知っていただく為に、「関所」という言葉を選びました。
	大日寺	互相渉入	『金剛頂経』という経典に出る、弘法大師もとても大切になさった言葉です。 「一人の人間は自分以外のすべての存在によって生かされており、同様に、すべての存在のために自分がある―。そのようにして、あらゆるものがお互いにつながり合い、影響を与え合いながら、全体としての世界ができあがっている」という意味があります。 多様性を認め合う社会において、他者の欠点を探して批判するより、長所を見つけて感謝するようにこころがけてみましょう。そこに、すべてが調和し、皆が個性を活かし合いながら幸福に過ごすことのできる、マンダラの世界が出現するはずです。 他者を大切に！自然を大切に！そして、自分を大切に！
	国分寺	如来加持力	読み方は「如来加持力」である。配置の仕方についてはここでは触れない。 『大日経（大毘盧遮那成佛神変加持経）』の解説書である『大日経疏』住心品の「薄伽梵如来加持に住す」の解説の中で、 〝薄伽梵は即ち毘盧遮那本地法身なり。次に如来と云ふは是れ佛の加持身、其の所住の處にして、佛の受用身と名く。～中略～ 既に遍一切處の加持力より生ず。即ち無相法身と無二無別なり。而も自在神力を以て、一切衆生をして、身密の色を見、語密の聲を聞き、意密の法を悟らしむ。以下略”とある。 加持とはお大師様の『即身成仏義』の中に“如来の大悲と衆生の信心とを表す。仏日の影、衆生の心水に現ずるを加といひ、行者の心水よく仏日を感ずるを持と名づく。”と有名なお言葉がある。 また、故頼富本宏先生の『空海密教と四国遍路』「密教の加持・祈祷」（H13 刊）の中で、「絶対的慈悲の阿弥陀如来の救済にしても、あるいは宇宙的真実在とも言うべき法身大日如来の大いなるいのちを認めるにしても、この俗世間とは質的に異なる聖なる存在が私たちに力もしくはエネルギーを与えてくれる。それを『大日経』では「如来加持力」と称している。」と書かれている。 思いがけずむづかしくなってしまったが、要するに大日如来様を始めとする諸仏・諸菩薩は常に自分達に救いの手を差しのべてくれているといえるのではないだろうか？

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	善楽寺	背暗向明	『背暗向明』（はいあんこうみょう） お大師さまのお言葉で、暗い方へ背中を向けて、明るい方へ歩んでいきましょうという意味です。 前へと一歩一歩、ただひたすらにひたむきに歩んでいく。 お遍路だけではなく、人生においても大切なことではないでしょうか。 あなたの一歩は、明るい未来への一歩です。 お大師さまがお生まれになった記念のこの年に お大師さまが歩んだこのお四国から 明るい方へ 明日へ 未来へ向いて。 さあ共に、確かな一歩を踏み出しましょう。
	竹林寺	虚往實帰	「虚往實帰」 「虚（むな）しく往（ゆ）きて實（み）ちて帰る」と読みます。 これは弘法大師が唐での師であった恵果阿闍梨（けいかあじゃり）を偲び、その人となりを讃えた碑文の中の言葉。 恵果和尚はお大師さまに密教の奥義を残らず授け終えるや示寂されます。その際、千人を超す弟子を代表してお大師さまが和尚の徳行を讃仰する碑文をしたためたのでした。その中で、お大師さまは恵果和尚がいかに清貧であり、正法を伝えるに努力を惜しまなかったと述べています。 何も持ちえず空っぽのままで入唐したけれど、得がたい教えを十二分すぎるほど授かり持ち帰ることができた。師の厚恩への尽きることない感謝と慕念がこめられた言葉であり、またお大師さまの入唐求法のすべてを表す言葉です。 虚しく往きて實ちて帰る。 皆さまのお遍路の旅もそうであればいいですね。 そして、昨日より今日、今日よりも明日、明日よりも明後日、と心がけながら日々をていねいに努め、生涯を終えるとき、今生を實ち實ちて生ききることができたと思えるなら、これに勝る幸福な一生はないと思うのです。
	禅師峰寺	煩悩即菩提	煩悩を通じて菩提に至る
	雪蹊寺	禅	
	種間寺	以信貫道	以信貫道 信ヲ以テ道ヲ貫ク 何事も志ざしを決めたならば最後迄でやり遂げる（成しとげる） 例えば八十八ヶ所巡拝を発願したならば（歩くにせよ、車にせよ） 道中苦難が有ろうとも挫じける事無く遂行する。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	清瀧寺	同行二人	お四国はお大師さまのご修行の地です。私たちがお四国を巡るときお大師さまに出会います。いつも私たちに寄り添い導いてくださいます。
	青龍寺	無	無
	岩本寺	蒼生福	「蒼生の福」とは人々の幸福のことです。「蒼生 の福　を増せ」（『御請来目録』）お大師さまの師である恵果和尚はお大師さまにこの言葉をおくられました。つまり恵果和尚はお大師さまに密教を人々の幸福のために流布しなさいと伝えられました。お大師さまはそのことを根本として「蒼生の福」のために全てを捧げられました。お大師さまご生誕 1250 年の記念の年を迎えるにあたり、今一度、お大師さまの教えや業績を意識し、お過ごしいただけますと「蒼生の福」で満ちあふれた世の中になるはずです。人々の幸福とは何か。時代によって変化しているのか。もしかして根本的なことは変わっていないのか。お大師さまを介してそのようなことを考える良い機会でもあります。南無大師遍照金剛
	金剛福寺	福寿海無量	南方観世音菩薩の慈悲は果しなく無量であり我々衆生を一時も忘れることなく守ってくれます。
	延光寺	金剛不壊	堅固にして壊れないもの。 それはまさに御仏の御教えであり、我々の信心の力そのものであります。困難多い世の中ですが、心の芯は腐らずに一つ一つ歩み進めたならば、花はやがて咲くでしょう。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	観自在寺	縁	人は一生のなかで、いろいろな出会いがあります。 人生そのものが「縁」の連続といっても過言ではありません。 出会ったご縁を生かすことができるのは心の持ち方次第であります。 めぐりあいの不思議、出会うことの尊さに感謝する心が大事ではないでしょうか。 お大師様もご縁を大切にされ、いろいろな場面でご縁をいかし、いかされておられました。
	龍光寺	壽無涯	果てしない幸せ。 自我を離れ、一切の欲望からの解放を得て、はじめて仏の境涯に入ることができると説かれている。まさに極楽浄土そのものですね。真の幸福なのです。真の幸福を得る為には、生涯をかけた努力が必要となるでしょう。
	佛木寺	五大に皆響き有り	五大（地水火風空）とは大宇宙を構成する五つの要素であり、それらの働きはみな互いに響き合いながら森羅万象が成り立っている、という弘法大師のお言葉です。私達を含めた全ての存在は独立して存在するものは一切なく、全ては因縁の流れの中で関わりを持ちながら、響き合いながらこの世界が成り立っているのです。皆さんがお遍路の道中で感じた爽やかな風や温かな太陽のぬくもり、のどの渇きを潤す冷たい水や美しい鳥の鳴き声、それらはすべて大日如来からの説法でありメッセージです。四国の豊かな自然の中で身体・言葉・心を正しく保ちながら仏様の声に耳を傾けてみましょう。
	明石寺	済世利	人々の生命や生活を救い　人々の役に立つ。　またみんなが幸せになり　すばらしい世界が生まれます。 あらゆる生命を大切にし　みんなのために行動し　あらゆるものに感謝しましょう。
	大寶寺	法縁	法縁・仏縁を感じながらお遍路をお参り下さい。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	岩屋寺	修証不二	「修行」とは日々の実践・積み重ねです。 繰り返し繰り返し同じ事を続けることもあるでしょう。 その結果、効果が直ちに目に見えるものとなって現われることは、むしろ少ないようなものかもしれません。 そこで諦めることなく、辛抱・忍耐を持って継続することが大切です。 「証果」とは悟りを得ることです。 目に見える目標の達成、それにふさわしい人々の評価・賞賛は、大いなる満足、やり甲斐の実感となります。 その日を心に描いて、そこに向かっての日々の努力は尊いものです。 しかし、現実は厳しく、 早々と結果の見えるような事は、小事であり、大したことではない、と思わねばなりません。 日々の弛まぬ務め・精進こそが生命であり肝腎であり大切なことであると、それこそが目標であると覚悟して歩みを進めましょう。 その辛抱によってこそ大きな目標もきっと達成できるはずです。
	浄瑠璃寺	一字含千理	お大師さんが著した『般若心経秘鍵』は、私たちに最も身近なお経『般若心経』を密教の見地から註解した有名な論書です。 本書の要は「ギャテイギャテイ～ソワカ」で著された秘密真言を説く箇所にあり、お大師さんは次の偈文を用いて、真言の優れた効能を簡潔に表現しております。 「真言不思議　観誦無明除　一字含千理　即身證法如」 真言は不思議なり　（真言には人の思慮が及ばない特別な力がある） 観誦すれば無明を除く　（本尊を念じて真言を唱えれば忽ちに迷いが晴れる） 一字に千理を含み　（真言のわずか一字に無限の道理が含まれるが故に） 即身に法如を證す　（この身このままで真理を得ることができる） 元来梵字で著す真言（マントラ）は、正しい音声を発することを肝要と為し、言葉の意味や内容を求むべきものではありません。 千万無量の理法を秘めたご真言、その一字一字に祈りや願いを添えて、どうか丁寧にお唱えください。
	八坂寺	三句五転	三句五転 「実の如く自心を知るなり」と菩提心の開発を説きますところの大日経は即身成仏の経路を三句の法門として説いています。一つの菩提心が三つの段階を踏んで発展してゆくことを三句の法門は説き明かしています。 三句の法門とは一つには「菩提心を因となし」二つには「大悲を根となし」三つには「方便を究竟となす」ということであり、まず菩提心を発こすことが成仏道の出発点であることを示しています。次に、その菩提心といえども仏さまの豊かな慈悲心を根っこに持っているから、大きく成長することを教えています。そして究極の目的、これを究竟といいますが利他の方便に徹底することを方便をもって境地となすと述べています。さらに大日経疏は、この三句の法門を具体的に説いて五転の法門としています。 五転とは、発心、修行、菩提、涅槃、方便でありますが、真言行者の求道は、この順序にて進められ、これが即身成仏への道であること、そして真言密教の根本教理であることが示されています。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	西林寺	清浄	我々の心は生まれながらに、けがれがなくみんな清浄であるが、社会生活を続けるとともに少しずつ濁っていくものです。心静かにお参りし、本来の清らかな心を取り戻しましょう。
	浄土寺	遍照金剛	「遍照金剛」には二つの意味があり、大日如来さまと弘法大師空海さまです。 大日如来さまは、真言宗の御教えの中心においでの仏さまです。その御教えは、ありとあらゆる場所に、太陽の光のように届き、なおかつ慈しみの光ですから、影を作ることはありません。その御教えは、鋼のように揺ぎなく光り輝いているのです。このことから、光り輝く鋼のような教えが、遍く私たちを照らし導いて下さることを「遍照金剛」と表しているのです。 またお大師様が書をしたためた際には、ご自身のことを「遍照金剛」とお書きになられています。これは、大日如来さまのお説きになる御教えを、お悟りになられた弘法大師空海さまは、大日如来そのものであり、大日如来さまと一体になられたことを表しているのです。このように「遍照金剛」には大日如来さまと一体になられた弘法大師空海さまの意味が重なっているのです。
	繁多寺	大菩提心	「三昧耶戒序」に もし善男子・善女人・比丘・比丘尼・清信男女等あって、この乗に入って修行せんと欲はん者は先ず四種の心を発すべし。一には信心、二には大悲心、三には勝義心、四には大菩提心なり。 もし信仰厚い男子または女性、比丘・比丘尼、男性の在俗信者・女性の在俗信者など出家及び在家の人がいて、この真言乗に入って修行しようと希望するならば、まず四種類の心を発すべきである。一つには信心、二つには大悲心、三つには勝義心、四つには大菩提心である。 と説かれる。 「弘法大師　空海全集　第四巻　遠藤祐純訳注」より
	石手寺	明星来影	今年はうるう年。 私が四国遍路を歩いたのもうるう年。 １２年前、絶望と自責の念の渦の中、生きることを終えるはずが、かえって生きる力・生き直す力・生きていく力をいただいたお遍路さん。 それからの私は、多くの人との出逢いと福縁に恵まれ、今のしあわせを感謝できる私が有ります。 私を迷いから救ってくださった四国遍路。有難うございます。 （女性。歩きへんろさん文集より）

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	太山寺	二利双修	仏教の精神に自利利他という考え方があります。自利とは自らの修行、努力によって自身が利益を得る事、利他とは他者を利益する事で他者の功徳を施す事です。 つまり、他者の幸せ、利益の為に尽くす事が自らの利益にかなう事をいいます。自分の利益と他人の利益とは相反するようですが、お大師様は自利と利他の調和を図かり修める事、「二利双修」が真言密教の目的であると言われています。 人生は四苦八苦で意に沿わない事もありますが、利己的なものの考え方や行動は少しでも慎み、広く社会を見つめる事が大切です。日々の出合いのご縁を大切にし、二利双修の精神で自己を高めるとともに、人の痛みや苦しみをよく理解し、優しく手を差し伸べられる生き方を心から考える事が出来ればすばらしい人生だと思います。
	円明寺	一期一会	四国霊場を遍路していただく皆様は、それぞれの思いを持ちお参りいただいています。お先達さんやベテランの参拝者も多数おられますが、大多数の方は、初めてお参りいただくため、霊場寺院としては、極力良い出会いがあるよう心がけています。その気持ちを表す「一期一会」は、寺とお遍路さんとの心のつながりです。圓明寺としましては、今までも、そしてこれからもこの気持ちを持ち続け接していきたいとの思いから、お大師様のお言葉では無いですが、この言葉で表したいと思います。
	延命寺	衆生	わたしたち衆生（生きとし生けるものすべて）をいつもじっと見守ってくださっているお大師さま（弘法大師さま・空海さま）は高野山奥の院にいまだおわします。 でも、いつでもどこにでも現れてくださって、落とし穴があればそっとふさいでくださり、どの人にも”あれっ！今の方はお大師さまだったような…”と、助けていただいたりした経験がおありではないでしょうか。 ひとりの仏様を拝んだら、ほかのみんなの仏様も喜ばれますよ！と、お大師さまは、平和共存のお考えを広めておられます。 ”虚空尽き涅槃尽き衆生尽きなば我が願い尽きなむ”と、わたしたち衆生は常にお大師さまに見守られて生きているありがたくもったいない一人ひとりなのです。
	南光坊	皆共成佛道	「願以此功徳　普及於一切　我等与衆生　皆共成佛道」は普廻向文と云い、日常の勤行や法会の終わりに唱えられる偈文で『法華経化城喩品』に説かれています。 「自分が修行した善を廻らし、すべての生きとし生けるものが皆ともに仏道を成就することを願う」という意味です。 先の『化城喩品』では南光坊御本尊「大通智勝如来』が長い修行の末、悟りを開いたことを知って、天上の梵天が大通智勝如来に説法を請う時に、この偈を唱えました。 菩薩と呼ばれる大乗仏教の修行者は、修行の功徳を自分の為だけでなく、他者の悟りや幸せの為にも廻向することが大切であるとされています。 仏縁あって四国遍路をなされるとき、積善の功徳を廻向し、共に正しい仏道を歩んで参りたいものです。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	泰山寺	邊地	平安末期に撰述された梁塵秘抄に「我らが修行せしやうは、忍辱袈裟をば肩け懸け、また笈を負い、衣はいつとなくしおたれて、四国の邊地をぞ常に踏む」修行者達は土佐の海岸にやってきて難行苦行をしていたことが偲ばれる。 昭和四十年頃から壇信徒を引率して五十数回お四国参りをした（今で言うツアー遍路）。 土地の人から「土佐のゴロゴロ石・飛び石・はね石」などという言葉を教えられもした。種崎の渡し船で雪蹊寺へ、宇佐からポンポン船に乗って横波三里へ。情緒があった。今は宇佐大橋が架かり、アッという間に青龍寺。 四国を打ち終え奥の院に詣でて、感無量で互いに手を取り合い「また来年もお会いしましょうネ」と涙ながらに分かれていく人が、今のツアーにどれ位いるだろうか……。
	栄福寺	発心即菩提	弘法大師が日本にお伝えになった密教では、覚りの心である「菩提心（ぼだいしん）」をおこすと、またたくまに覚りの境地に至るという思想 があります。それが「発心即菩提（ほっしんそくぼだい）」です。小さな「菩提心」でも、その小さな種を大切に、覚りの心（仏さまの心）をおこしてみましょう。そこにはたしかな覚り、仏さまがおられるのを感じてみてください。 また遍路で出会うあらゆる人、物、自然が仏さまの仏性（ぶっしょう）をお持ちです。その仏性を見つめることも、菩提に太く繋がっているのではないでしょうか。
	仙遊寺	ありがとう	「盲亀浮木」という言葉があります。大海中に棲む盲目の亀が百年に一度だけ水面に浮かび上がりますが、その際海面を漂っている流木 のたった一つの穴の中に頭が入るか、という話です。確率的には有り得ない話ですが、この確率こそが私たちが人として生まれる確率、 また仏様と御縁を結ばせて頂く確率です。 私たちは一人で生まれ、生活している訳ではありません。まず父母があり、社会があり、あらゆるいのちが巡る環境があり、そして見守って くださる仏様がいるからこそ、実は日々をつつがなく送ることができます。普段当たり前に思えることも、「盲亀浮木」の話同様、本当は 「有り難い」機会に恵まれていまここに存在するのです。お大師様は、あらゆることに感謝の念を持ち、受けた御恩に対して報いること、皆と 共に歩みその努力を続けることを尊ばれました。報恩謝徳の念を常に持ち、日々助けられて見守られているという実感を大切にいたしましょう。「ありがとう」の言葉が自然と口にできる毎日を、今こそ実践いたしましょう。
	国分寺	心香	「身は花とともに落つれども心は香とともに飛ぶ」 性霊集にある言葉です。 私たちのこの体は、咲いた花がやがて散るように、いつか必ず、朽ち果てるものである。 しかし、善き人生を送った人の心は、花の香りが散った後も遠くまで届くように、浄土へ昇る。 そして、その香りは残された人の心にいつまでも残るだろう。 限りある人生です。善きことをなしましょう。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	横峰寺	縁	遇うと遇わざると　何ぞそれ遥かなる哉（性霊集） 「出会うか　出会わないか　それには遥かな違いがあります」というお大師様のお言葉です。 誰かとの出会いや助け、仏様とのご縁（出会い）によって良い方向、結果へと向かうのです 今のコロナ禍ではお四国参りに行くことは難しいし、人との出会いが少なくなっております。ウイルス疫病は身体不調も恐ろしいですが、人との繋がりを奪うところも恐ろしいです。そんな今だからこそ大切にしたい言葉です。
	香園寺	三密瑜伽	三密瑜伽とは、仏様の身（形、動作）口（語、言葉）意（念い、考え）と衆生の身口意とを、修行することによって、加持観応して一致融合を体感することを言う。三密（仏）と三業（衆生）は別にして、衆生の三業は惑業（煩悩）を具うので業と言う。これは髄縁門に生仏鹿細 の別ありとあるが、法爾門には、生仏平等にして、衆生の三業も本性如来三密と異なることなく、その実相は皆六大（地、水、火、風、空 、識）法性の作用で、本不生位に住して法爾に衆徳を具えるので密と言う。瑜伽（yoga）とは相応の議。
	宝寿寺	天養降福	天養降福（てんようこうふく）とは、天に応じて人を養えば（育てれば）、天から幸福（さいわい）が下される、という意です。 中国の正史『後漢書』（ごかんじょ）「此天之意也、人之慶也、仁之本也、倹之要也、焉有応天養人為仁為倹、而不降福者乎（此れ天の意なり、人の慶なり、仁の本なり、倹の要なり、いずくんぞ、天に応じ、人を養い、仁をなし、倹をなすこと有れば、降福ならざる者、あろうか）」の一節が出典で、当寺の山号に由来します。 ◆寺紋が亀甲紋ですので、縁起の良い亀をイメージして描きました。
	吉祥寺	同事是貴	同事是貴（同事是れ貴ぶ） 大士の用心は、同事是れ貴ぶ　（出典　弘法大師『高野雑筆集』 「大士」とは菩薩、仏道修行者のこと。 「用心」とは仏道修行者がする心がけのこと。 「同事」とは菩薩、仏道修行者が衆生を導くために相手と同じ立場に立って物事を行うこと。 文意は、菩薩、仏道修行者は常に謙虚に、相手に対して心がけを忘れず、常に相手と同じ立場に立つことが一番貴いことである。
	前神寺	慈愛	慈愛…慈しみ　愛する 慈しむ心と　愛する心を　もって接する

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	三角寺	皆悉四恩	人は皆、様々なかたちで支えられ、恩を受けている。それは父母のように身近な存在から、一切衆生に至るまで全てのものからである。
	雲辺寺	三心平等	〈三心平等〉 性霊集より 若し自心を知るは即ち仏心を知るなり、仏心を知るは即ち衆生の心を知るなり 三心平等なりと知るは即ち大覚と名づく、大覚を得んと欲はば、まさに諸仏自証の教えを学すべし
	大興寺	金	当山本堂の丸瓦に使われている字になります。お大師様の直筆と言われている「大和洲益田池碑銘並序」の中の“遍照金剛”の字から引用されていると思われます。
	神恵院	微雲管	〈微雲管・みうんかん〉 お大師様は御入定にあたって「未だ下らざる間は、微雲管より見て信否（しんぴ）を察すべし」（御遺告・第十七条）というお言葉を示されました。入定の後も弥勒菩薩の住する兜率天の浄土より、我々が信仰と修行に励む姿を見守る。という意味です。
	観音寺	普済光	〈普済光・ふさいこう〉 仏様はその加持力によって大いなる光を放ち、この世の全てを照らし、普（あまね）く衆生を済（すく）う功徳を我々にもたらして下さいます。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	本山寺	抜苦与楽	抜苦与楽（苦を抜き楽を与える） お大師様は般若心経を説かれた『般若心経秘鍵』のなかで、一心に唱えることにより仏様へ願いが届き果報が得られ、一切の苦しみを鎮め安楽となる、と述べられています。 本山寺の御本尊　馬頭観音さまは馬が草を食むが如くに皆さまの苦しみを除いて下さいます。声に出して御真言を唱えれば真言本来の、お力が発揮されます。真摯に礼拝致しましょう。 合掌。
	弥谷寺	壽無涯	四恩に感謝し、常に善行方便を廻らして生活に生かす。 四恩（両親・国・衆生・三宝） ①　生を授けてくれた父母への恩 ②　国家の安泰を守る為政者への恩 ③　互いに生かし生かされ助け合っている、生きとし生けるもの全てへの恩 ④　三宝すなわち仏・法・僧がもたらす菩提信仰の恩 仏　この世の真理を悟った者 法　この世の真理（諸行無常、諸法無我、涅槃寂静） 僧　この世の真理（法）を教え伝えるものたちの集団 善行方便（十善）をめぐらす 六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧）を常に心に持つこと。 布施（他の者に役に立つ行いをする。） 持戒（十善戒を持ちそれらを保てるよう精進する） 忍辱（全ての物事に対し忍耐強く対処する。） 精進（常に努力することを怠らない。） 禅定（常に平常心を保てるよう精進する。） 智慧（仏の教えを信奉して生活に生かす。）
	曼荼羅寺	法身説法	世の中の全ての現象は大日如来の説法である。
	出釈迦寺	和顔愛語	和顔愛語（わげんあいご）とは 『大無量寿経』に『和顔愛語にして、意を先にして承問す。』とあります。 自らが相手の気持ちや状況を汲み取ってよく受け入れ、言葉はやさしく、柔らかな表情で接しましょう。という意味です。 参拝される方々皆さまのこころを汲み取ることは難しいですが、まずはお一人、お一人に穏やかな表情で挨拶をすることを心がけたいと常に思っています。 そして四国八十八ヶ所の参拝が実りの多いものとなり、また訪れたいと思っていただけることを願っております。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	甲山寺	同時成仏	四国をお参りするお遍路さんは、山門を一歩くぐれば、曼荼羅の世界へ入ると思い、手水舎で手を洗い、口をすすぎ、身を清める。そして本堂の前に至り本尊を拝みます。本尊を仏として拝むとき、拝まれる方はもとより拝むわたしもまた仏となるのであり、これを「同時成仏」というのであります。 私たちが葬式法事に行って死者の霊を拝むのは死者の霊が仏だから拝むのではなく、仏になるために拝む訳ですから、拝まれることによって成仏する。仏を拝むことで仏が自分の胸の中に入り、自分も仏の胸の中に入る。それを繰り返すことで、仏となるのであります。 だからこそ心新たにして拝むことが大切です。したがって、祈りは決していい加減な気持ちで行ってはなりません。
	善通寺	四恩	我々が平等に恩恵をうけているものに四つあることをいいます。その四つとは、父母の恩・衆生の恩・国王の恩・三宝の恩とであります。三宝とは、仏宝（仏陀）、法宝（仏陀の説いた教え）、僧宝をさしますが､そのうち僧宝とは､教団（仏陀の教えを奉ずる人々の集団）を意味します。 弘法大師は「本来、すべての生きとし生けるものは、わが四恩として感ずべきものなのである」〔『十住心論』 1〕と、四恩の大切さを説いておられます。 弘法大師御誕生 1250 年を契機として、お大師さまの教えを深く学び、真摯に四国霊場にお詣りし、日常生活で利他（自分の功徳・利益を他に施して救うこと）にご精進下さい。
	金倉寺	知自心	釈尊の教えは一説に八万四千の法文があると伝えられ膨大な経典が現存しております。それら多くが衆生済度の教えです。その中で最終の教えと伝えられている教典に大日経という経典があり、その一説に如実知自心という文言があります。それはつまり多くの教えがありますが最も大事な教えは如実に自分自身の心を知る事が大事であると記されています。
	道隆寺	実修実証	修行を通して自らの心と体で学んだことを「実修」また学んで得たことを人々のために活かして行くことを「実証」とし、この二つの修行を「実修実証」という。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	郷照寺	厄除衆生	当山は厄除大師の寺として尊推されております。 815 年に当寺を訪れた弘法大師が御自作の像を刻み、厄除けのご請願をなされたことから脈々と今日まで続き、信仰を集めるようになりました。 「厄除衆生」とは、命あるすべてのものを救う「衆生済度」に厄災を除く「厄災消除」の意味を合わせ持った造語になります。
	天皇寺	為道求道	「道のために道を求める」 これは、弘法大師空海が伝教大師最澄と交わした書簡により御自身が得られた、「求道とは何たるや」の答えです。 あらゆる覚悟を伴い唐より持ち帰った経論疏の借用を幾度となく願い出る最澄に対して空海は、「自身の名利を求めるための道を求道とはいわず。道を求めるための道を求道という。」として、空海自身の求道精神を示しました。 道を求める理由が、ただ自身の名利の為であるならば、真に道を志すものではない。求道とは己を無くすほど道に没頭できることである、という空海の一貫した思考が表されております。 「為道求道」の真髄とは、遍路道の原点となり得るものであります。
	国分寺	護國安民	国を護り、民が安らかに暮らせるようにと聖武天皇が願って国分寺は建立されました。その願いは弘法大師に引き継がれ、今も変わらず当山は護国安民の寺として国家の安泰と国民の幸福を祈り続けています。
	白峯寺	観蓮知自浄	「観蓮知自浄：蓮を観じて自浄を知る」 般若心経秘鍵の分別諸乗分（一乗）より 訳としては「蓮華を見て、自らの心が清らかなことを知る」 意味は、「蓮の花は泥水の中からきれいな花を咲かせるように、この世がどんなに混沌としていても一人ひとりの心の内は本来清浄であるということを蓮の花が咲く様子を通じて知る」というようなものです。 またこの後には「見菓覚心徳：菓を見て心徳を覚る」と続き、 訳としては「蓮華の種を見て、心にあらゆる徳性がそなわっていることを覚る」 意味は「蓮の種を見て、本来一人ひとりの心の内にはきれいな花（信仰）を咲かせる種（仏徳）が備わっていることを覚る。」というようなものです。
	根香寺	施無畏	当山本堂の扁額に書かれている言葉です。さまざまな不安や畏れを取り除いてくださる方、施無畏者ともいい、観世音菩薩のことを指します。 観音様のようにはなれませんが、人に施せる者でありたいと思います。お金や物でなくても施すことはできます。眼施（優しいまなざしで人に接する）、和顔施（穏やかな笑顔で人に接する）、言辞施（優しい言葉で人に接する）、身施（ボランティア）、心施（思いやりの心で人に接する）、床座施（座る場所を施す）、房舎施（安心して寝られる場所を施す）があります。無財の七施といいます。日々心がけたいものです。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	一宮寺	増蒼生福	蒼生の　福　を増せ（性霊集） 師匠の恵果阿闍梨より密教の全てを授かった時にいただいたお言葉。 「早く郷国に帰りて以て国家に奉り、天下に流布して蒼生の福を増せ」 蒼生とは多くの人々のことであり、これを見ると恵果阿闍梨がお大師様に絶大な信頼と期待を抱いておられた事が分かります。 帰国後のお大師様のご業績がそれを物語っています。
	屋島寺	洗心	おへんろを廻ることで心が洗われる。
	八栗寺	禅默為心	「禅默為心（禅默を心と為す）」（『小僧都を辞する表』より） 私の座右の銘であり、座禅瞑想に励むというほどの意味です。 お大師さまは五十歳のとき淳和天皇より小僧都に任ぜられました。それに対するお大師さまの対応は驚くべきものでした。この句の前に「山藪を宅と為し」とあります。自分の本分は山中に住み、仏の世界を観じることだというのです。そこには当然ながら衆生済度の祈りも含まれていたはずです。その本分を重んじて、お大師さまは小僧都の任を断られてしまったのです。自ずとお大師さまの生活や心がけが理解されましょう。私もお大師さま入定の年齢を超えて、老人の仲間入りをしましたが、冒頭のお大師さまの言葉を杖に僧侶としての人生を少しでも有意義なものにしたいと考えています。
	志度寺	補陀落渡海	補陀落渡海（ふだらくとかい）とは、南方海上にあるといわれる観音様の住む山（補陀落浄土）への往生を願い、その地を目ざして小舟で海を渡ろうとする信仰・修行のことです。 当伽藍は観音様の浄土として古来より信仰され、後白河法皇撰「梁塵秘抄（りょうじんひしょう」に載る霊験所です。本尊十一面観音像は観音様の御自作で、藤原不比等が「死度（死渡）道場」と名づけたことや、冥途から生き返って志度寺を修復する人びとの物語が志度寺縁起として伝わります。「志渡寺」とも表記される史実から、蘇生信仰につながる観音信仰、つまり「死に渡る」「彼岸に渡る」の願いが寺名となり、補陀落渡海との深い関係が考えられることに由来する印文です。 ◆文字を使い補陀落渡海の情景を表現しました。 補を太陽、陀の文字で観音菩薩を描き、落渡海は大海原をイメージしています。

印のデザイン	札所	記念印の文字	記念印の説明文
	長尾寺	同行二人	四国遍路の金剛杖、近年は「同行二人」が書かれている 当山の大師堂前にこの歌碑がある あなうれし ゆくもかへるもとどまるも われはだいしとふたりづれなり いつもお大師さまが自分に寄り添ってくださっている　心配することないよ　安心して行きなさい　いつまでも　どこまでも これこそがお大師さまのお心であると　南無大師遍照金剛
	大窪寺	行行至圓寂	行行として圓寂に至る（般若心経秘鍵） 行き行きて修行を積み、円満寂静の境地へ到達する。 『八十あまり寺をめぐりて大窪寺 このまま大師に帰依しまつらむ』 『今迄は大師とたのみし金剛杖 つきて収（納）める大窪の寺』 大窪寺に伝わる二首の歌は、どちらもお四国遍路修行を結願した折に詠まれたものです。どちらも結願の喜びや達成感のあふれる歌ですが、ある種の悟りへ到達した心境もうかがえます。懊悩しながら探し求める旅を終え、全てをお大師様や仏様にゆだねる人生の旅へと歩み出すのも良いかと存じます。 合掌